

～被災者と支援者がともにきり拓く一歩～

## 2/11 学習会「広げよう、家族保養」

2017年2月11日(土・祝) 13時30分より参加者19人(会員11他8)。WithYou さいたまで、学習会をおこないました。

講師は早尾貴紀さん(東経大准教授「311受け入れ全国」共同代表) 吉田千亜さん(「ルポ 母子避難」の著者)です。

\* 講演記録はYouTube「カラッポのおうちの会」にアップしました。ぜひご覧ください。

早尾貴紀さんからは自らの避難の経緯、受入全国の活動にいたるまでの経過や各地の受け入れの活動について、また原発事故をとおして国とは何か、ディアスポラ(離散民族)の思想にも触れながら、これからの保養の活動に何が重要なのかについて示唆していただいたと思います。「そもそもの問題(国策としての原発とその事故、このような事態を招いた遠因)」にも思いをはせるための材料をいただきました。

また昨年の総会にもお話をいただいた吉田千亜さんからは、今年3月末に向けての避難の協同センターの取り組みや、現在、避難のご家族が置かれている状況、さかのぼって2011年3月以降、原発事故により避難するに至った状況(だれもその時点で子どもと家族の命を守りたいと選択したことが、後に自主避難と呼ばれるとは想像できない、ひっ迫していた)など、データ等を参照しながらお話しいただきました。そして今年、2017年の3月という期限を示した、苦しい現状にさらにご丁寧にも追い打ちをかける避難支援の打ち切りや、実質的に、強制的な帰還政策の影響下にある方々の現在をうかがうことができました。参加者は19名で少なめでしたが、講師の話す内容に引き付けられ、会場内には一体感が感じられました。

カラッポのおうちの会の「家族保養」の視点、強風にぶっ飛ばされそうな逆風ですが、支援の意思の表明である「できることをやり続ける」ためには頭を低くして地道に続けるしかない。。親子が心身ともに成長する必要不可欠なものはなんでしょうか。家族の紐帯をつよめていくためには物量の力のみではむりです。長く続く被災の被害について理解を深めていきたいものです。

会場アンケートには時間が足りなかったのではとか、会場討論の時間をとってほしかったという希望のほかに、一放射能、原発事故、原発難民、母子避難、棄民、帰還政策、3・11、ディアスポラ、オリンピック、ヘイトスピーチ、基地、沖縄、etc その関係がわかった—と書かれた方もいました。最後に上坂戸で1週間後に予定の「小さき声のカノン」の上映会実行委員長のお母さんから映画会の紹介と講演内容について発言がありました。当事者の一言の感想は会場を緊張感で引き締めました。

“原発事故 “をそれぞれの日常に持ち帰る、次回の学習会もお楽しみに！”

\*\*\*\*\*

家族との楽しい時間を  
をたいせつに!

### 保養のための交通費 7月以降もおうちの利用家族へ支給予定

助成金を今後も申請し、ご自宅からカラッポのおうちまでの交通費は支給の予定。どこにお住まいでも、放射線心配が少しでも離れ、保養においていになるときに利用してください。

(2017年5月)



屋外トイレの着工1



カラッポのおうちと倉庫



野外トイレ着工2



カラッポのおうちの部屋



カラッポのおうちの背景

### ■ 311 受入全国加盟団体交流会

2017年1月22日(日)10:00~16:00 渋谷勤労福祉会館

カラッポのおうちの会が加盟する受入全国の交流会に参加しました。避難の協同センター、瀬戸事務局長、「いわき放射能市民測定室たらちね」事務局長から活動について聞きました。特に瀬戸事務局長からは3月末に住宅支援が打ち切られる状況下で県外避難者の皆さんの状況をお話いただきました。毎年、住宅へ住み続けられるか不安な1年ごとを過ごしながら6年が経過し、その間に子どもたちは育ち、いろいろなケースがあるものすでに避難先での生活に何とか溶け込んでいっている例もある。各自治体独自の支援にばらつきがあることや、継続が決まった自治体でも再入居の形になるため敷金など金銭的に厳しい。また引っ越しをする場合も費用が重くのしかかってくること。新しい入居基準で家族がバラバラになることで、今まで家族が持ち寄っていた生活費が足りなくなるなどひっ迫した状況がわかりました。

### ■ 原発問題を考える埼玉の会

2017年2月5日 さいたま市 下落合コミュニティセンター

おもに除染作業を請け負っている下請け会社や作業員の実態や労働環境のお話を聞きました。あまり聞くことのできない労働現場のお話で、新聞でも東電が支出しているという危険手当が作業員にほとんどわたってはず、地方から除染の作業に来て待機に要する宿泊費、食費を下請け企業から借り入れ借金が膨らんでいく様子などから、無責任な東電や政府の仕事ぶりが想像できました。原発に直接作業員としてかかわっている方々の健康も心配。

### ■ 白河市「ままつぶ ぷち茶会」

始まったばかりのママの会に参加させていただき、白河市の状況(原発からの距離があるため市民に線量の高いことへの関心が薄い)や、全国でキャンプやシェアハウス、一戸建て保養はいろいろなタイプが活動するにもかかわらず、保養することの困難さを聞かせていただきました。参加者が1名の時には、あるお母さんが事故当時3歳(?)くらいだった大変活発だった娘さんが話をしなくなり、笑わなくなったが、保養を繰り返し外遊びの機会が増え表情が出てきたそうです。大変心配され、保養に熱心に参加していたそうで、保養体験から正直なお話を聞くことができました。支援にはとても感謝されているそうですが、同時に応募、落選など繰り返して疲れているとのことでした。

○子どもだけや母子を対象としたキャンプは多いがお父さんは行かない。○リピーターは後ろに回されるためなかなか順番が来ない。○部屋の収容人数が多く狭いことがある。○保養の場所の線量が高い。

お話を聞く中で「支援を受ける」というだけで、すでに「上から」見られていると感じることもあるということを忘れないようにしたいと思いました。カラッポのおうちからとして、何時でも利用できる滑り止めの保養場所に利用してください、お父さんも巻き込んで保養してくださいとお願いしてきました。

# 3月14日埼玉新聞に「カラッポのおうち」が紹介されました

丁寧な聞き取りで、会の活動を正確に伝えています。住宅支援打ち切りをはじめとする国行政を挙げての「帰還」政策が保養や避難継続を続けている被災者にとって大きな打撃となっていることが、柔らかい表現で読み取れます。とても、良い記事にさせていただいて、私たち自身が自分たちのやっていることの意味をかみしめることができました。

長瀬町矢那瀬(やなせ)の山あい、秩父鉄道の電車が走るのどかな風景の中に、畑に囲まれた小さな軒家「カラッポのおうち」はある。2011年の東京電力福島第1原発事故で被災した人たちに宿泊や休憩をしてもらおうと、横浜市の夫婦が用意した。名前の通り「空っぽの家」は、訪れる人を待っている。(板本圭)



のどかな長瀬町の風景の中に建つ「カラッポのおうち」

## 横浜の杉村さん夫妻 長瀬に交流の場

は、夫妻が立ち上げた「カラッポの家」(会費約1700円の年会費(1人千円)や個人からの寄付で賄う)は、被災地に心を寄せ、はしい、という思いから、トリップ・イミンやカヤックなど、子どもが外で遊べる体験会も開催。日常生活を離れて「息つく」という家族がホーム・ベースなど探している。14年4月から約3年間で、リピーターも含め延べ約48人が宿泊した。

家族4人で2回、それぞれ3日間滞在した福島県の30代女性は震災後、夫を残して県外の親宅に母子避難。夫は毎週末1時間半かけて会いに来たが、女性も父親の介護と避難生活による過労で病気になる。夫の言葉もあつて半年ほど県内に戻った。しかし放射能が気になる「ひとりの環境に子どもを置く」といならぬ離婚も考えたこともあった。「おうち」では、子どもを父と外でキャッチボールや縄跳びをしたり、秩父地域を観光し「過」じたりした。「子ども」のことを考えて「放射能」が気になる「おうち」にいた。このように場所を提供してあげて、来てよかったと喜んだ。2度目の利用は夫が申し込み、もう一度家族4人で訪れたという。

◆差別も分断もない  
「おうちの利用は1年夏ごろから始めた。途絶えていた。葉子さんは一掃済みの避難所が今春相次いで解除されるため、決断を迫られているからかも知れない。もう少し落ち着くまでは仕方ないかな」と語る。

それでも再び被災地を訪れ、「おうちの情報を提供し続けている。私たちも高齢になってきて限界もあるけど、被災者を孤立させたくない。これは差別も分断もない場所だよ」と伝えていく。夫妻は「カラッポのおうち」は「でも待っている」

## 愛あふれる 空っぽの家

被災した家族のために利用して

◆家族の場  
「おうち」は横浜緑区の農家杉村長世さん(80)、葉子さん(86)夫妻が管理する和室やダイニングキッチンがある約70平方メートルの平屋住宅だ。葉子さんの両親が住んでいた家が11月に空き家になったため、「被災した家族のつながりを強めたい」と家族保護に利用することを決めた。

有志2人で掃除や床材の張替えは約半年かけて改修。その間に福島県を被災地を訪れ、現地で子育てする母親の話を聞いた。葉子さんが「おうち」を渡したのには14年4月だった。

葉子さんは「被災地では、原発事故で避難する人ごいない人の間に分断が生まれている。時間がたつにつれ、家族がほらほらになつてしまつて危機感を抱く。「家族内で交流をしてほしい」。場所を提供するのは、支援を押し付けるのではなく、できる限り放っておいてあげたい。10人程度泊まれる分の布団や食器などを用意し、基金を利回り交通費も補助するが、洗濯や料理は利用者やボランティアがやる。利用料はカンパ制だ。

◆言葉が通じない  
葉子さんは「おうち」は杉村さん夫妻が1カ月前に家を手入れしている。水光熱費や改修費を最低限の維持管理費

## =カラッポのおうち利用のおがあさんより=

平成 29 年 3 月 28 日～3 月 31 日まで、大人 2 人、子ども 2 人でお世話になりました。3泊ゆっくりと休ませていただき、また秩父や長瀬の周りをみせていただき、心があらわれました。子供達の喜びようがハンパでなかったです。

原発が水素爆発して汚れてしまった私たちの住まい。一年二年と無我夢中で子供達と生活してきたのですが、時が経つにつれ、福島のおうちには帰れないんだなあ、辛いなあと日々思いがつのってきて、ウツウツとしてしまうことが増えたようです。

2015年夏休みから保養に行ってみようと、2度程親子保養に参加して、子どもといっしょに行ってみたりもしたのですが、私の性格から、とても気づかれしてしまって、10日間の日程が終わるころにはヘトヘトでした。子どもは楽しくて楽しくて最高なのですが、私がついていけず…。今回のようなカラッポのおうちでだれにもきがねせずのんびりできる保養は、心のつかれた人には最高だと思います。デトックスや線量の低いところで被爆のリスクを減らすということも大切ですが、避難者たちの心の疲れを取るといことも大切だと思います。私たち子どものいる世代だけではなく、避難で畑や田んぼをうばわれた高齢者の方達にも、カラッポのおうちのような所で土にさわったり、のんびりさせてあげたいというのが今の保養には必要になってくるのではないかなと思います。

私も将来必ずこういう人のお力になりたいと思います。今回東京から離れて子どもたちの姿を見てやっぱり子育てするにはこういうところがいいなあとしみじみ実感いたしました。ありがとうございました。

\*デトックス：解毒、毒だし

(大熊町から避難後、今は新宿区にお住まいのご家族。お母さんが休めることは家族みんなもしあわせになります。そして、自分のことだけではなく自然と周りの人への思い、すてきな感想をいただきました。その後、連休中に郡山市、千葉県鎌ヶ谷市から、2家族がカラッポのおうちを利用しています)

## \*人と人のつながりを（運営委員会から）

前年まで、あるおうち管理・整備、被災者支援を除いては事務局体制を中心としたものでした。今まで、保養相談会などによる宣伝に頼ってきましたが、現在、関東各県に避難されているご家族に、「福玉便り」や裁判傍聴、カラッポの会総会、学習会を広く案内することを通じて少しずつ広く知られてきています。しかし、被災されたご家族との接点はまだまだ多くはありません。一戸建て、家族保養の必要がある家族に利用していただくために、積極的に被災者のコミュニティに働きかけたり、また横のつながりを持っていないでいるご家族がもっと利用できるようなお手伝いが必要だと思えます。そこで放射線被害に会っている地域や関東各都県で避難している家族の横のつながりを作ることに尽力されている団体や個人に、直接カラッポのおうちを紹介したり、声をかけることによってほっとしてもらえそうな役割りもはたしていきたいと思います。当面は開かれているママの会などへ参加させていただきたいです。

## カラッポのおうち会計からお願い

現在、残金が4万円ほどになりました。今回、会報発送に合わせて会費のお願いを早めにさせていただきました。7年目に入り、支援を必要とされるご家族同様、支援する側もいろいろな状況の変化があり、カンパも減りつつあります。でも、放射線被害は複雑に変容しながら続いています。保養の場を提供し、多くのご家族に利用していただくため、物心両面から息の長いご支援をよろしくお願いいたします。



### 脱原発市民会議かながわ&ハーベストムーンLIVE

6月11日(日)14:00~19:45 新横浜スペースオルタ 各企画1000円 通し2500円(前売2200円)

14:00 おしどりマコ・ケンの横浜白熱実験室「ドイツから帰って-脱原発のいまを問う」 15:10 脱原発シンポ「さあ、脱原発の哲学を問おう」 18:15 脱原発コンサート「津軽三味線“はやぶさ”・李政美 with 武田由美子」 お問合せ:事務局

### ★大人の気持ち

記者会見で復興大臣が「出ていけ」発言をした映像が流れました。幸い、言われた記者が「黙りません」と応じ、自主避難は自己責任か?と質問を繰り返しました。怒鳴って大臣は会見場から立ち去ろうとする。付き人がぞろぞろ付いていく、片や記者のみなさんからも待ってください、大臣!の声がない。逆ギレ事件が報道されると、引き下がらず質問した記者を「三セ記者」と中傷するツイート……▼この国はどこもかしこもひどいことになっていると思えました。顧みて他をいう一は王道を説いた儒家孟子の言葉と聞きます。この復興大臣は答に窮し関係のない話を家臣たちと始めるダメ王を超えて、対話の場所そのものをお開きにしてしまう▼前後して、内閣官房長が教育勅語の教材使用を認める閣議決定のあと、勅語の徳目には、いいところがある」と記者質問に堂々とこたえたのにも驚きました。教育勅語は、国家の王(朕)が臣民(家来)の道を述べた儒教徳目を、明治国家が学校に持ち込んだもの。天皇の家臣たらんとした当時の大人たちの生き方を、子どもたちの育ちの世界である「学校」に押し付けた。これは大人が子どもにも与えた「学校」という場所でのいちじろしい逸脱だった「私はそう考えてきました▼原発災害にあった友だちをいじめてはいけません」という子どもたちの世界のルールは、いったいどうしたらつくられていくのか?いま、大人たちがしていることが必ずしも正しくはないという洞察力を子どもたちが学校で身に付けることによって「私はそのように思います。学校は「徳目」の暗唱や刷り込みを行う修養場ではなく、社会に開かれた場所であってほしい▼相馬高校放送局元顧問渡部先生と練馬上映会でお会いしました。会場発言の機会があり「保養」について学校では、どのように取り上げているのか質問しました。先生からは「私の知る限り被災地学校現場では皆さんの活動情報は子どもたちにもっと届いていない」との答えがありました。子どもたちと家族に対する「情報遮断」があると理解しました。私たちは、子どもたちに、大人たちが被災した人々に心を寄せ、助け合って生きようとしている姿があると、もっと、しっかり伝える義務があると思えました。

### 長瀬やなせ「カラッポのおうちの会」事務局

◆電話045-933-1792 杉村 (Fax 兼) ◆メール karapponouti@gmail.com

◆ホームページは「カラッポのおうち」で検索 ◆Face Book コミュニティ「カラッポのおうち」もあります

◆郵便振り込み講座00250-9-136022 ◆ゆう貯口座10210-3511241 杉村葉子